

落語・
時間を
訪ねる旅

第一回

「池田の猪買い」 「池田の牛ほめ」

(落語)

ナビゲーター
落語家
林家竹丸

林家竹丸



「落語みゆーじあむ」1階には本格的な高座があり、「ここで一席を申し上げます」と始めると、まさに水を得た魚。1カ月に1回(第3土曜日)、寄席も開かれている

取材協力：落語みゆーじあむ

古典芸能といえば、まず能・狂言、文楽、歌舞伎。上方ではかつてこうした芸能が花開きました。約三百年の歴史を持つ落語も、上方と江戸でほぼ同時代に発祥したとされています。歌舞伎とも深い関係があり、互いに人気を博しながら庶民の間に広まっていったそうです。上方古典芸能で扱われている話を手がかりに、縁の深い場所を訪ねて、何かおもしろいことはないかを探そうというのが、この新連載の狙い。あっ、申し遅れましたが、初めまして。私は林家竹丸と申します。四代目林家染丸を師匠に持ち、落語家の道に入って十年余。まだまだ未熟者ですが、よろしくお願ひ申し上げます。



林家 竹丸 (はやしや・たけまる)
落語家。本名は前田仁。1965年宝塚市生まれ。95年に四代目林家染丸のもとへ入門。天満天神繁昌亭などを拠点に、落語会に多数出演。講演、コラム執筆など幅広く活躍している。入門までの約6年間、NHK記者として徳島・大阪でニュース取材全般を担当した異色の経歴を持つ。2006年に第43回なにわ芸術祭(産経新聞社主催)新人奨励賞を受賞。

落語みゆーじあむ



「落語みゆーじあむ」1階では、上方落語の紹介をはじめ「猪買い」のパネルなどを展示、「牛ほめ」の家を再現している

池田の牛ほめ

ご隠居さんから「池田のおっさんが最近家を普請したから、家をほめれば小遣いをくれる」とすすめられた男。「おっさんが気にしている大黒柱の節穴を見ついたら、『そこに秋葉はんのお札を貼れば、火除け魔除けになって、穴も隠れる』と言ったらええ。ついでに牛もほめといて」とほめ言葉も教えてもらう。翌朝、男は池田へ。どうにか上手く家をほめて小遣いを手に入れ、調子にのって今度は牛をほめにかかり……。家をほめるくだりは「畳は備後表の寄り縁に萩の違棚、南天の床柱、天井は薩摩杉の鶏空(うずらもく)」などと描写が実にリアル。牛のほめ方は「天角、地眼、一黒、直頭、耳小、歯違う」。

今回お邪魔したのは、池田。「池田の猪買い」「池田の牛ほめ」などの上方古典落語の舞台となっている地です。

今でこそ池田と言いますと、梅田から阪急電車に乗れば二十分ほどで行ける大阪のベッドタウンというイメージ。それでも大阪からは十六km離れてますから、まだ徒歩や馬で移動していた時代には、日帰りで行けるギリギリの距離やったようです。「池田の猪買い」「池田の牛ほめ」も、落語で「旅ネタ」と呼ばれる話に分類されています。

「池田の猪買い」では、主人公が朝早く、大阪は船場の井池筋に住んでいるご隠居を訪ねます。そこから大阪を立ち、てくてく池田へ。大阪に近いながらも、ある程度距離がある郊外都市としての豊かなイメージがあったからこそ、落語のネタにも使われたのではと、思ったりもします。ちなみに、もともと落語の演目というのには、きちんとした名前はないんです。寄席などで、前にどんな話が演じられたのか、楽屋入りした落語家がかかるように、演目を符丁で記帳したのが、一種の「通り名」として使われるようになったそうで、そんな符丁にわざわざ地名を入れている珍しい例がこの二つ。当時の庶民にとって「池田」という地は、やっぱり少し特別な場所だったのかもしれない。

池田の猪買い

“冷え”に悩む男がご隠居さんのところに相談にくる。「それなら猪の身が効く。池田の山獵師・六大夫さんとご行っといで」と道を教えてもらう。男は物覚えが悪く、行く先々で道を尋ね、みんなを閉口させながら池田まで。男は六大夫の家を訪ね、「どうせなら新しい肉がほしい。ちょっと猪撃ちに行つてえな」と頼み込む。六大夫はしぶしぶ男を連れて山に行き、つがいの猪を発見するが……。道順の説明のくだりで、淀屋橋、大江橋、蜷橋、お初天神、十三、三国、服部、岡町と具体的な地名が登場し、旅ネタらしい雰囲気醸し出す。



池田

池田はかつて交通の要衝をしめる商業都市として賑わった。今もその名残を旧市街で見ることができる。その中心地域に、市立上方落語資料展示館「落語みゆーじあむ」が平成19年の4月にオープンし人気を集めている



「話では、淀川を渡し船で越しますが、今では淀川には“渡し”はありません」(竹丸)。池田に向かう旧街道は国道176号線となり、淀川には十三大橋が架かっている。その大橋に平行して、北摂に田園都市を生み出した阪急電鉄の鉄橋も架けられている



池田を目指す男が目印とした「服部天神宮」。阪急「服部」駅のすぐ近くにある。少彦名命と菅原道真を主祭神として祀る「足の神様」として知られ、今でも多くの人がお参りに訪れる



旅の始まりは、「池田の猪買い」の出だしに登場する「井池筋」から。「繊維問屋がたくさん並んでは、そのどこかに“ご隠居さん”が住んでいたはず」(竹丸)

岡町

服部

三国

十三

お初天神

淀屋橋

井池



断家芝居「首咄種歌舞妓粧(はなしのたねかぶきのいんどり)」の絵看板。明治16年(1882)中座

その池田は、五月山を背後に控えた風光明媚な土地。古くから交通の要衝、物資の集散地として賑わい、多くの文人墨客が来遊し、独特の文化を生み出した町やっただけです。そうそう、芝居小屋の呉服座もありました。近代には、旧街道沿いに一九一〇年、箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄)の線路が敷かれます。阪急とは、その創業時からゆかりが深く、池田には日本最初の郊外住宅地も開発されました。今でも、逸翁美術館や池田文庫といった文化施設があり、町並みにも歴史の香りが感じられます。

その池田に、昨年、「落語みゅーじあむ」ができたことを知ってはりますか？ 落語に取り上げられた町やという事で、落語に関する資料が集められて展示されている珍しい施設です。本や映像などの資料が集められているのももちろん、月に一回、落語会も開かれ大盛況。私も、昨春秋にその高座へ上がらせていただきました。

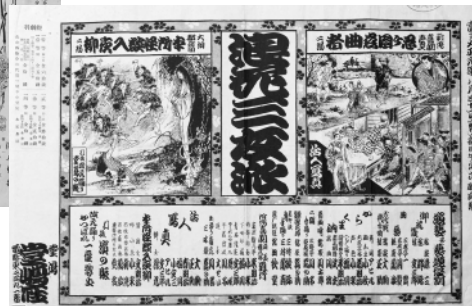


池田文庫には歌舞伎と縁が深い落語関係の資料も収集されている。館長補佐で歌舞伎研究で有名な荻田清・梅花女子大学教授は、大学時代に落語研究会に所属し、落語の歴史にも造詣が深い。竹丸は、偶然同席した演芸ライター・日高美恵さんと夫妻と一緒に、貴重な資料を一室で拝見。机の上に広げられたのは断家芝居の絵看板。二代目の桂文枝や文之助などの名が並ぶ。明治に入って大阪で初めて行われた断家芝居のものだと言われている

明治42年(1909)弁天座「浪花三友派独有粹劇 楽語粹劇」(松鶴、文団治、春団治、松喬、米朝、新左衛門 他)



落語家は「断家(はなしか)」とも言うが、その断家がする芝居は「シカ芝居」と呼ばれていた。その芝居の今で言うポスターに相当するのが「断家芝居番付」で、明治・大正時代の貴重な資料が池田文庫に所蔵されている。写真はそのうちの2点



大正1年(1912)堂嶋座「浪花三友派」(文団治、米団治、福円、春団治、染丸 他)

池田文庫が所蔵する錦絵には、明治期の役者絵の上の囲みに断家が描かれているものが3点ある。初代桂文枝の弟子の桂文三、桂文之助などの名が見える



芳峰画「嵐璃々の芸者米八(右上に桂文之助)」と「中村雀右衛門の天一坊(右上に桂文三)」、明治10年(1878)

阪急学園 池田文庫

取材協力：阪急学園池田文庫(掲載資料は同館蔵)

阪急東宝グループの創設者・小林一三によって1949年に開館された「池田文庫」には、宝塚歌劇を中心に演劇専門の図書館として、映画・演劇書はもちろん、役者絵・絵看板・番付などの歌舞伎関係資料が集められている。中でも、上方役者絵の所蔵が豊富なことで知られる。池田文庫の母体である阪急電鉄の資料も揃う





「落語みゆーじあむ」の隣にある「嘉づ家」では、落語「ぜんざい公社」にちなんで、ぜんざいも販売している。旅に疲れた時にピッタリの甘い逸品。ほかにも、落語の話を元にした「刻(とき)うどん」(時うどん)や「ちーずとてちゃん」(ちりとてちゃん)といったオリジナルメニューを店頭に掲げた店が10軒以上あり、「おたなKAIWAI」として展開中

落語・時間を訪ねる旅
 第一回
 ~上方古典芸能と文化を巡る~

また、近くの商店街では、例えば落語「饅頭恐い」にちなんだおまんじゅうを販売してたりして、落語を元にしたおこしをしようとして試みてはります。落語に興味がある方は、是非一度足を運びください。
 (談)



池田はかつて酒づくりの町としても知られたところ。町中に酒蔵も残る。「呉春」は、今でも池田でつくられるお酒として有名



©阪急電鉄



池田駅の南側に広がる整然と区画された住宅街は、日本初の建売住宅が並ぶ「室町住宅街」。箕面電車の開通とともに開発された。当時、庶民の憧れだった郊外住宅の先駆け

開通当時の箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄)沿線の様子がイラストで描かれた大正2年(1913)の「箕面電車回遊双六」(梅田から終点の「宝塚パラダイス」行き)。右上にある「いけだ」のコマには当時の新しい住宅街が描かれている

箕面電車回遊双六



©阪急電鉄

箕面電車と郊外住宅

(室町住宅街写真と箕面電車回遊双六は阪急学園池田文庫蔵)

五月山は池田のまちのシンボル。猪も時には出没しそう？ 山中にある秀望台からは、池田市街はもちろん大阪平野が一望できる。「長かった旅もここが終点です。当時の人は健脚だったと感じさせる1日でした」(竹丸)



かつて猪名川沿いにあった芝居小屋「呉服座(くれはざ)」跡の石碑。現在は明治村に移築され重要文化財となっている(写真右)。池田にあった頃は、地方巡業の歌舞伎をはじめ、壮士芝居、新派、落語、浪曲、講談、漫才などが演じられた

